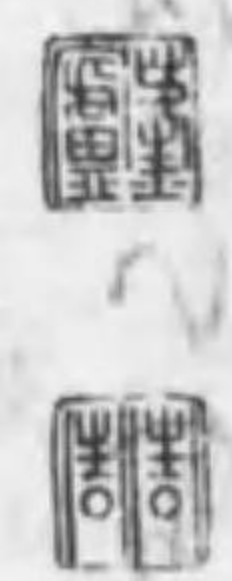


始





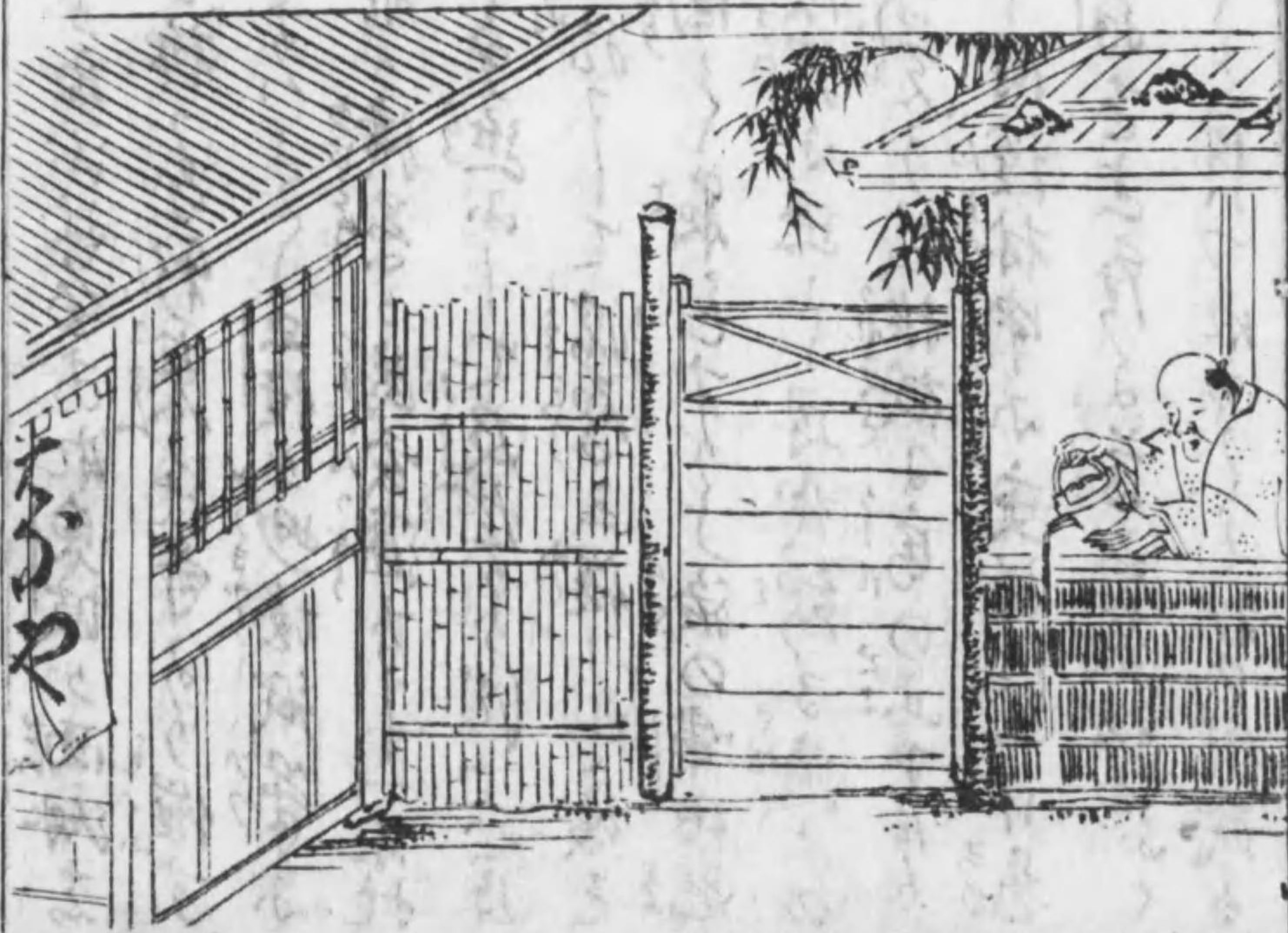
昔者鳥醉藏此物也久矣後授之於白河鳥黑  
鳥黑深秘而不置云往年予遊于奥羽而道經  
其地竊得就鄉人而摹之今茲縮圖以補蓼太氏  
蕉翁真之脫漏而已 儀伴閑人



之月  
平  
日  
池

す家人少一己世は何もの年小う有けん石山北奥又深居  
して姑く幻位唐忠幽深残乐む欠享は年秋鹿嶋忠吟  
仍何里同く又年松玉を携りて大杉又遊びえ流二年首良  
を舉ぐ陸奥に旅及同七年の秋の箱舟暫又在し一が流急  
拓もあまの奈良の重傷をうけく赴んとて支考博徳成  
侍ハ歩成進く風托する此日刺を患を大坂は崇秀の屋  
仁者ちが後至小休は病中の吟一極よ居んで爰は枯壁をうけ  
ほつる是風流の終なり終る一七日成るく双は葉又十  
有一嗚呼悲ひう奈此更をたたび江左は龍舉してあり始  
自注の妙を筆紀違り一能清を一そ美成徳奇又蘇ハむ  
先家人成敵以は後代に垂る空句西變一方より流を  
後進察せし平くた家考成るく以て三昧と存は

伊家奇人詠 卷文中



中真筆 貞



歌ぞんば一「象深の雨や西柱がぬふ北をみれ東枝の西海を  
 浮小舟は「田一板挿くまはる柳の彩古今此奇あり耀す  
 「古池や煙をひはむ水の書雲ありとく玉燈の妙境紙等ふ  
 流ぐりう「茶は雲鐘と上世の清茶り幽玄海あり「木北  
 下汁と給もけ久良くあそむ遊ふて及屋々「六月  
 や帯の雲並く嵐山此句句結して濃厚三層一て後を  
 此旨意を知る「名月や池我回く取とすう洛の嘯出祀  
 して云く友人雅園は死は廣汎の遊く月我起る適よの  
 縁を感して手轉涼ある哉受うこ「枯枝は鳥の止まらり  
 秋北香又いそく翁若く里「樹陰林中小交柱は一日是  
 句我唱の友人持柱と「三翁をよるうよさふ我社もふく  
 一て一洒を奈せりま「何うくと何いつれあくも秋の風成と

傳ふ翁感は杜ぐ此句我はより風の字を内に留て北枝  
 示は枝のそくいまど風北字の佳な海ふいぬす翁響を因く  
 我たむむるく妙み也地は子あり還り月く異席く「一公  
 病小淋和味を忘るくおえ羅中箱加別金城は移御高安哉  
 休處の砌り表亭小て一板舎合何里「に千客意山海の除  
 味を設けたり煙は影と佛人すて後舎我約をんこは舞い  
 はく今我高してた「心巻北程の云津は雨ぐり「揺らくい  
 風程の結ふ「我を涼世をよるく定めず或は時来り「墨  
 香條は爰我結ひ或は山中小一村名をを渡ぐ結るに彩る珠  
 揚滋味あに風海の本意あらんやと挿しとそ化は柳枝香  
 柳全集此名家哉おせるとも生濃海のはる屋りちは「  
 ありてふり十六巻のわつう小家此始り宗院室の作古今

非家書人語

卷之十

三二

世間の有りある者なり。その「陽類の萬葉を室一魚の産  
 平穩中寓無限悲涼宜を流るる晋子り雄高を擧する中成  
 殊一多ま而を吟く後世人の「漏する」山踏来る何や  
 伊く一葉州「梅が香」あつと日の出る山海く系「是はつり山を  
 目比を招かすけい「あつ海はさるぬ人の言さよ」  
 なる小喰水より「壺すはく宵著らる」  
 人も年よれ初時ぬあまを正愛つちるに流く味いす人の何る  
 屋くすす「交風種破路」亡一愛して難強とあり再度て  
 西漢五言とある三愛一「歌行雜詩とあり四愛一「沈宋  
 律詩と成海蓋一「益我害」改々害を益小和けらるるを  
 本和和亦の習りめとのつたは「又い」  
 は何一として正海雅波津の浪とらるるに於て我招は「み」れ「海

ね撲るゆもねさるる「唐和をすする海望く系とい「るよ  
 西行法沙「流き海」あつとある海を北有厚く望初一句二句を  
 歌屋り宗種宗長掛河の城は「以出の能満も愛句擧句  
 といひるもちく「只云在あり宗温守武等大能波集飛梅子  
 句我撰ぶといくごといすご「一身の準繩を立げ望らるる我招承  
 貞直がこいひ 九重より海を海を蒙てあり「式古本  
 定はる時「雅波の宗園古風を感破」  
 一時の雅集より人我絶倒を「む是我後林と稱す翁いすご宗  
 所た里「はるその風より人んでよよれ「あま」が「柳」眼を  
 て次歌集を撰に「是の法徳」二面五十七面中「稍後林我雜まらん  
 する「根古」天ゆ通「松津の風骨を採り山家集に寂寥我  
 たらり「はく」函玄名作は人情の理をを説くはれ「正風安小

大威して天下後世まで自らに傳傳中興の大祖と稱譽せらるるも  
宜方依りお掛まはれ是を及ぶ油切を依り傳傳の形は成  
水さ之河ひ千幸茶茶一大家にのく免生我汝度する  
等とやいとん去小学尚すん一破考あれは掛とせはら

模本具南

模本の母は南之竹中東味が子あり赤と源助とす一附の神田  
於玉の池は後より儒成実の秋は生小学ひ匠を學内何某信  
成大藤相出を佐玄龍画成英一掃小借りて多能ふ何の  
以よりう為つまのくは冠首より番其角の男怪の文一七室  
番其と米希が祝は清する此字あり一名探合番子はと雷  
指子涉川とも画名菓子といへる狂雷雲根而崇六病庵善哉居  
文合唐等此諸号ありしを假しとや杖次とて人をも拘らば

後改  
姓字

為り酒を飲ぐに理する成ははるりたり一或日ふ寄付文  
北今美小形合せんく若心一ける我前生傍ら小碑碑一仰き  
居より云ま一妙句はありと記ありましくいふ仰見銀河底と由と  
冠里公金中此今小金掛ありて銀掛をたぬ何と哉是むつと  
答く金玉ありつと流玉るあきりぬ一と生序智大累はの類あり  
反享中照陣町一居汝様す彼空が池り樹香とす小回居せり  
と載するも此流なり或才あり一書名の息を巻に彼是きん佳へ  
逐して回く此書何もの小袖んたり我附置我考するに彼を  
連中の先聲又流すん一と仗是能ふく書を交えり扱点料も  
逐してんやとの小答く料は不賃又收並あまと匹は里一もい  
まより今附け人の徳もたなく重力もあくて四下り古人忠酒  
居り扱一風種我驚り甲乙をまると同日の徒あるんや昔

非下下下下下





日や船院どの、顔れいろ「悪まれくおくらある人々の地はれ  
 正変をばえたるもの一文をばえ様はし「おす様くお眼前風振  
 人西く云ふはこれに「一雨や家我回く時なく後来又かぬ  
 「夕涼よくど男お生れくる雄抜倫を「福妻やけのいふ  
 為乙由ぐ洋の什はよ出るに似たり「声くれて猪れ齒か「客の  
 月或洋すくく今令此子後変於詩何減李王と海宗「意盛  
 子て歩るく又婦く余「名月や夏めたり人小松の軽「冬来てを  
 鹿野ふこはる高り余生後横句在る月屋「文能潜の松意  
 翁与此子也一朝不可論尽去を後人何るひの思らく晋子  
 調異師翁之殊不知難而合者有り蓋し支考許六の紀東儀倫  
 多く空作思を焦「奇我索むとい人とも意解れ縁陽晋子  
 が自放するに及ばげるるや遠——

服部嵐雲 附烈女

服部嵐雲ハ流別小坂並村小右生に幼名久る助或云了湯時若孫云  
久若助と此雲の字とあり長里で東武又お杉庄原也云お杉「お何りて  
 又井よおお公も勅とて「生は「産を世といひり「一年君  
 侯の信して我第お坂里井の端よ家く足濯んとするに卒「  
 有り紀雲り雲の降来る成んく「武士此是で米とぐ愛う赤と  
 成まはすさみ「う素より業成難れ本お抱く山色を赤まん  
 とす志一止ぐ「成社を「て「居宅を退の日常御衣類  
 雅翁等よいすると「素も手に携へばを修けと「並唯一身  
 風雲とたお漂ひ出いつ「う蕉つ「極ぐ能名を治助といふ後  
 嵐雲といくるハ嵐此庵の言を「でりと思ひ寄ける悪さ今更  
 政んもおこが候と笑める度く「なり書れ名を列つといふも

出嬌り夕暮りも横江

女考九句

鶯十六屯廿

其角

半面美人

沉香亭裡

白

木乃りふ徳さかめゆふ橋東

半面美人

百花嬌語

翠蓋

隊玉簪

探荷

弄晚涼

探草

白





句維一此什温厚和平實小平安の宗を承く家一君不のや  
 多いそくと筆北桶足見其莫逆一在法一在能身ハ瘦まけり作  
 里獨活一筆又風うろく来て吐き吐き此泡一竹の子や思は園と  
 把の美北一梅一輪一主人程の咳うは一涙海の不そり一とる  
 う家一初秋おん動きぬ纏すこれ皆思く足見再正風一其咳  
 年山竹井戸小宅を承く久く住せり時一室永正年十月  
 及に筆又十有四歳世一禁ち一禁ちる風北と為し用  
 而の息中ハ門人園竹と授け園竹是成更登又傳ふ後世其の下  
 風了浴する者多し主徳すこと大なるはや  
 向井玄来  
 向井平次前前の徳抄お人初めり又後く洛陽一居  
 往年蕙門小のく玄来と能名す主風徳書中と並そ玄先

半ふ屋一蓋一尚村英以所の魁あり一前形山はくあうと  
 小忌免とて一動も又えで細く川男くか一許叶来ぬお家  
 れを徳あり一玉柳の奥奈つ一や秋の影一尾尻のくえお記  
 海蔵くか一荒磯や走り別ある友中を抄寫死して後抄成  
 作く以て生流雨使り生性若深切ある皆人の知る所あり  
 生舎を居材と名く物記風俗又生舎一録去書して回く  
 一我家北能湯に遊ぶ屋一世の理屋をいふ一とるは  
 一移夕くく精を成思ふ一魚を成思ふハあふは  
 一迷く一灰吹をす月屋一烟草を嫌ふ小を何かず  
 一隣の居居成はづ一火北用ん一ハあ良は  
 いと風流一して可笑一支考が飯日記より玄来小烟管成  
 掃除するの癖あり又此を妙よ隣者居居とわいするあ至

是より此屋敷に此と平といへる者少く食ふは送る所ある  
 里の時一室永元年九月死に産根の許六その孫を作  
 曰く晴翁一室一樹あり清は居す弓矢成控て十五歳と  
 たり二十五年先此は合々三十年末大徳士何の法あり  
 先少意符と懸く風種此名ふ言ふり京少ふかあんと  
 子の院一産す南にお糸を押し東州此風成後す墨蓋  
 此阿正風体の眼を影紀湖此水まは里うう五月雨と  
 の櫻を蒙く不易流の巻成かち後孫の彩風と陰ても  
 函云名細みと忘まは一本枯の地もは流はぬ時あり  
 や雲雀の十文字とを申り又何水の仲秋一や岩端や  
 小も獨り月此室三詠して先少は年を懸りし月賞歌  
 古の飛送にい極里たけり一代の飛送も一友句持人

片く稀あはる一此を好といひ歌一叙句に及一り二十餘年  
 新水の辺つり室暖味名落材舎と少まむり人石山の幻  
 房と考を付ふんざ一深くをこを雅波の愛成まで  
 櫻を解た義仲奇此蘇も肩衣小潮淋を携ふ死後の  
 城成堅く守里法生我ちつけ初人を控く越の流伝  
 智く有波磯波の虫を選一晴此卯七夜即く波をま  
 むけ利我大形一力我よせく文選序考れ一人進み病  
 床小却ても三夜句化の虫をまはし何ある意つ滅亡  
 月日や何里らん去年のあの中誠の院家語ト玉ひぬ  
 今年衣交若文系年す秋九月この郎去くよと記足と  
 き此思ひをけせく人名揚成影るるや下果又支考が  
 材先生の挽奇何り云一晴

借史草

借史草の先代は尾陽大内の新法寺にあり初より学代好く傳  
 漢を究む好く向く経母の住く孝んたる才を以て生る所をれ  
 は赤城ゆづりく生るを慰む嘗て右の指小疵つけ刀此柄持て雜  
 しと語り壯年武茂輝しと後を宗と成し其時の口號多年負屋  
 一蠅牛化做蛤喻得自由火宅最怪涎沫不偶尋汰雨入林丘の山一溪風  
 了まゆる我雲れおやふつふ法華経を後編するより他るが  
 しをいふ何なるはしをの意門を盡んく附く其後借史す我よりと  
 波瀾此述し相考く余一木をや拈お代探はる名中一聖靈  
 も少く假此書の指小疵く余一旨のけり振向くは此書く余一書  
 立ちく我の余も立ちりり随言句をその作を可悦室に  
 元年二月に十二歳して此世我を余の人去來傳我作く

曰く今茲如月来れ日月の竹冠を残る抱く多祥沙身はら  
 里ぬと湖南の正秀が許より知はるより白の窪みはらり里洞  
 止免り孫ぬ津久くそけい人存むり一我思ふは尾張の玉  
 生れ亦凶候に仕つく一勇猛其名も有しころや一日ある  
 一人を假し竊し一君父の家我思ひ出道の傍小竊ねし  
 きりり墨滯り引替らねる中黒洛志史邦又ゆり重五兩亭  
 に假寐し先所不見く神らねしあり二尋れ故松の中  
 小臥をけり並へは百の火燒のよと面我はし一向て吟舎に  
 月く此人を鉄に先所好云ふけ借史を道に進み学はら  
 人焉よと立んる月我越屋より此を好とありりま下地  
 の強記るり羨むし一此れも性善み学ぶる我は其まは  
 感有りて吟し人あるく借史をたけりりお志するが如







斜あぐに文りすく小雷鳴地よを吹風靡をはあちけ  
 此が虚空欲穿閑是宝満山雷雨震裏更と具一おられ笑ひ  
 明してあまぬ身おられ後鳴くは久かきと嘆えし雲集れ  
 毛再を移るぐり今むちうた名おみ残まらぬ十年の笑  
 い三年此恨小化しそ悟るる年お然を生す惜ても程名  
 ましく此一向我手向く来くと涙あ我徳を信るおれ  
 名ましく妻や三年の生ゆくれ

森川伴六

森川伴六は江野彦城此士一名百伴字羽宮侍と云阿松と自稱  
 居我五老井と号にむき井小四郎河少一ノ草字藤原也二  
 小揚揮豆も織成三よ雲花雲は河波四ノ紫芝同舞の舞の舞  
 るるの李田が文は知るる人と成り敏達しく能くも長きり

又画成能す意存も画と云く沙と云く一能得ハ妻と米子と  
 素はと出けり生れお向すと無せり一本箱と成る程桐も若  
 芽の今お居の妻はゆきや帆くけ船一口又月のお波さ浪や子  
 規一竿と死装束や古羽平一着終此方を招致お盛り哉一欄  
 杆お定るや葉れ乾法沙一初霜や治承江戸名人を嫁入の  
 色るるり津あは沙翁双後そは送愛の櫻樹を伐く肯信哉  
 刻み是哉大津の智月尼く信る生又小いそく

信康公世せう持よお世せり此より目お交存の持若るいすこ  
 す此と云く存の像も皮延引ひけ度終も手お好れらまは  
 きを并れ古本とて刻みすひらせん兼て大方も像刻ま度全  
 了りてても初集あくとけむぐくも程又信康公の中お候  
 十月三日 素の後像より流るる葉もあし 伴六

智月尼様

生恩遇の海を忘るる事初に如く惜むるも晩年癩瘡  
 軋くして人小面する事一適道成るんと存取束る人河星  
 ども屏風を志記すく連ふと成許は凡一年金塔の葉子い  
 一月て對面せんる成れをむいりて屏風成陰んやと病床  
 迎へて飲酒不れよる殺刺唐くけ屋く臭氣芳くたりつ至  
 子ちくく奇て研破ちく破らるる後全合るは是バ病らんく  
 事不悲を予小隠も一皮剥子小お見えろ落し惚さる  
 風雅に控ての大丈夫をうりて何人伴へ合休をを正徳二年  
 小死後後焉の備へ一時打破屎糞壺芬や臭氣供梵天下海  
 死ぬる事と思ひしお上手も死ぬる屎上をちり此子終身  
 已むり成成句撰して化を皆蕩物と思へりなり平生の

後申一引弦を起く入るもの我れみ方まにさるぶまり彭老後  
 まで膚撓る目逃うけりい他家れ一奇物と稱すべし

東益村支考

支考之為流此人は一為様等小入く徳義重といし一ハ  
 冠の法なり吹毛湖也春三月彭揚牡丹花下風といつる傷我作  
 宗つれ言信り一系終も安ねもろる東於武寺の大舎小頭取殿名  
 備多ハケ條の前林我祖同に成り法春生先をゆみ違へ  
 様機を控きたるこくや嘗て野陽山田より身成置り白く何と  
 風家に秘み交る所り涼着その才成惜之能借を勤く意つ  
 入るむ功成く飯口すさりの見龍との鬚又徳るく此名白粒蓮  
 二を飯又飯る所りて及るおるるり三映の景小去る成  
 ち梅花仙人名稱あり坊号成東華西華と唱るハ何力一適道

子孫の傳をより破れ在るに盤子と呼ぶ家又在るまきの獅子老  
 んとの小支考にのりる舊名ありを字二教に涉りたり又文成  
 以く句有す著す而十論古の抄書はありと確編ありと發  
 句を斗てハ亦と許ハ魯衛と政身「序校」肺や加ひて梅ありと  
 灌仏や目出さるる小古ほあり「世子の形」安し淺く百一牛呵る  
 声小晴く月夕うあ「惠ん」古よを公の世で獨代身は「めけ」子僧形  
 我智す傍律を古て居る里りる「政身」衣許を解の公記する時  
 國に禁小使すれば金利の系中法肉食などの校従有りるを或  
 法例いす「免く」懐陸屋を「奉」せりちるに牛とあるべしと  
 いつ々に答く「牛」不ちる合点ぢや「昭」露夕すぢみ「一」年尾の巴  
 靜と傳涉「一」はうるこて著者此後「一」舟「一」乘り「一」りぬ「一」も去  
 此尖を去せぬといふと歎き「一」く此万字傳「一」の堂「一」殿「一」茶「一」小「一」多「一」り

雲雀の妙唱するや「一」笑えく「一」洋く「一」たる「一」海「一」上「一」を「一」書「一」る「一」を「一」交  
 ぬはぬき「一」捨「一」や「一」も「一」及「一」ぶ「一」ぬ「一」風「一」奈「一」ち「一」り「一」靜「一」村「一」此「一」齋「一」中「一」我「一」叩「一」い「一」く  
 「一」句「一」何「一」る「一」屋「一」や「一」と「一」答「一」ふ「一」答「一」て「一」曰「一」く「一」古「一」人「一」も「一」常「一」不「一」違「一」て「一」を「一」唾「一」する  
 とい「一」つ「一」り「一」初「一」十「一」か「一」方「一」る「一」ま「一」ゆ「一」く「一」の「一」句「一」按「一」此「一」琴「一」す「一」何「一」物「一」は「一」何「一」る「一」に  
 今「一」何「一」才「一」一「一」系「一」と「一」も「一」高「一」ま「一」し「一」る「一」何「一」を「一」ま「一」の「一」長「一」煙「一」す「一」海「一」す「一」ん  
 是「一」實「一」不「一」違「一」我「一」傳「一」る「一」人「一」の「一」徳「一」中「一」を「一」あ「一」り「一」と「一」靜「一」を「一」感「一」して「一」は「一」を  
 剛「一」大「一」皇「一」と「一」り「一」や「一」帳「一」争「一」は「一」く「一」在「一」る「一」を「一」人「一」は「一」り「一」く「一」通「一」り「一」去「一」年「一」我「一」後  
 る「一」何「一」小「一」尚「一」り「一」く「一」を「一」凡「一」を「一」慕「一」ふ「一」者「一」多「一」く「一」後「一」世「一」連「一」綿「一」り「一」て「一」流「一」石  
 一流「一」成「一」唱「一」は「一」は「一」を「一」是「一」す「一」と「一」此「一」老「一」が「一」使「一」ち「一」る「一」ず「一」や

曲翠 附幻住老人

曲翠 賦の曲ハは物撰術のま「一」く「一」馬「一」指「一」堂「一」と「一」号「一」に「一」切「一」記「一」より「一」惹「一」つ  
 小「一」遊「一」ぐ「一」を「一」老「一」手「一」と「一」稱「一」せ「一」り「一」る「一」念「一」入「一」て「一」を「一」り「一」る「一」茶「一」む「一」内「一」茶「一」が「一」思「一」ふ



尺く布一疋をよぬ村よりまんでお伊弉或振給ふ跡く布  
 城おし着物よと月継くあへ残を傳ふよんといふよぬ  
 いま紀継まきせぬ村聖路起出り白が立席く云く行ま  
 物着悪しそ衣久人されよと垢附くる古物を着る人  
 又ずして去にりり又美濃國經此所あ傳傳あよ初るま  
 逆此妻を逆くいとと産家の飾を収冬屋小神河まそ衣柳  
 小掛並より下め路とく起く又るに寄借はは屋お好て衣柳  
 此振袖よと月失より振は彼村の塗、係よまそと衣の  
 若くまましく怪給村人あ物くる小器此若よりは衣了と何  
 らんとまると此くく人る屋まらるに果してまも存く答  
 りるい今路早よりま出く係は雅風身小のく凌ぐより早  
 ま席く男女れゆるらに受ぬとまてや何んと修達振杖の

振袖杖使く返したまよりや又何まのまよや存りま姑く飯  
 居此此久く打籠まより何より日を或人今宵他家小能借何り  
 いちとせ五人と勤めける村抄答も我目おく起此月入て休ま  
 契系給飯給はでけは任在中みか能借より給る杖おより能借  
 せよと何まどやと答へより係よ人我も志まより能若  
 とハ此借れよりよ能係は

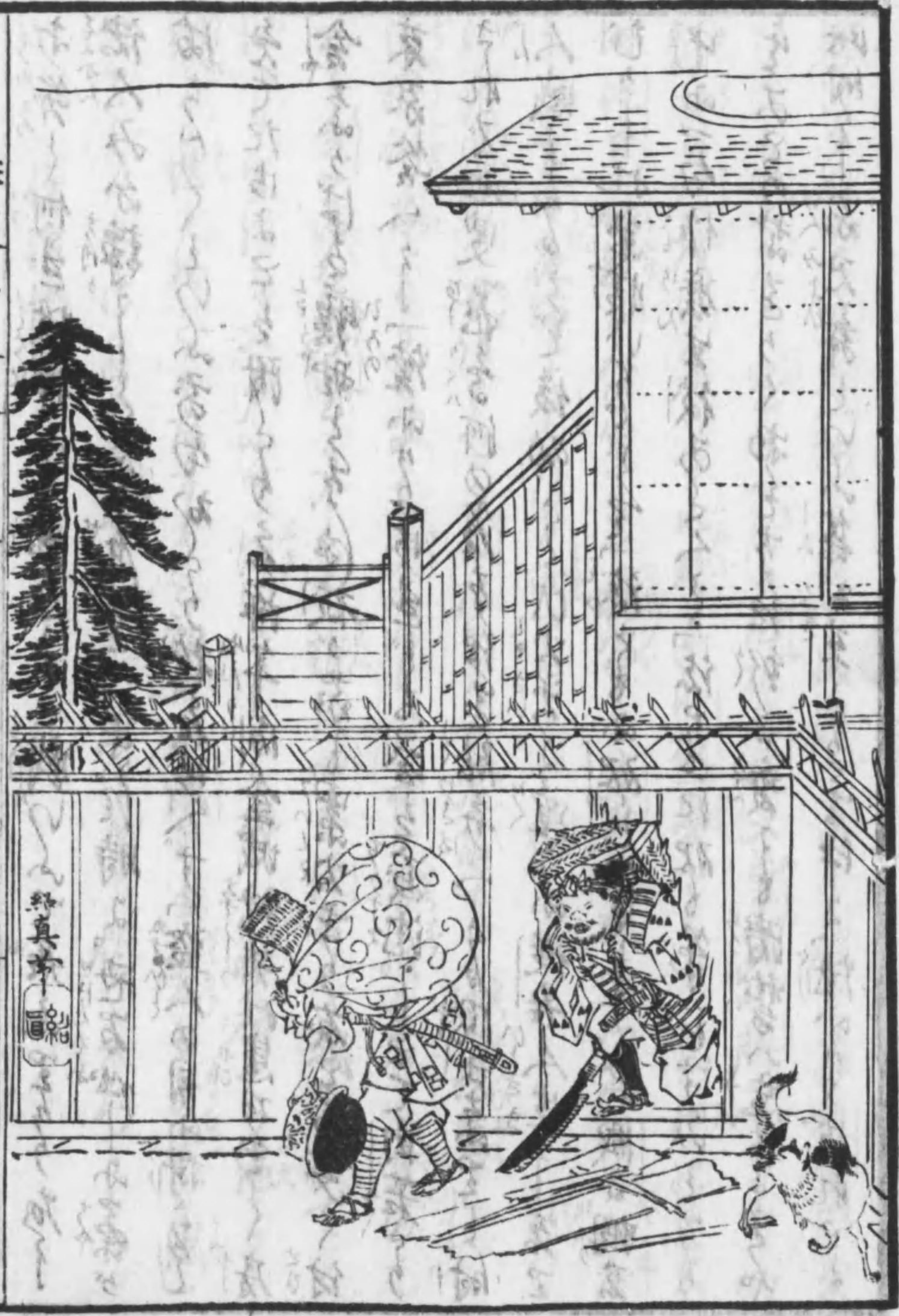
勾当

勾当を加列卯辰山より閑居く柳法新と号は常小能波何の  
 て意存杖妙と号ぶあより沙幕もは深志を感ドていつと一み  
 深く義仲寺山を世子れあより兼好は馬贊して「秋の色糖味香  
 壺もちり空よりとハ残されぬ此のを信能承の再杖捨人を深志  
 此意志を拂お捨く懸法懸と月も持席まよのくふるん杖









打寄く何は様持少々出た一と戯のふて君又里よりあり  
 諸人みお静しく生席を山座した時又「世百出」ふ茶袋  
 浦ちんくといふお句おくり枝を河へず盗人の目お掛らる  
 免でたはよこを附りりえ海年間金城焼失れ患何をく序  
 倉をうばる腫腫とを海枝がぶも累火さり友をち多く付  
 東家答へ「焼ふりりはさじも益之を流」さて自若り  
 された此更飛る河の岸を流を能弁つて「日風士ま里と時  
 人感」くると後物くくび火流く連る小後吾人生を「東王  
 むり」此氣情いふとと「流もふ取と等もすみ成る烟を  
 中ふ一向作廢生枝あこく」流もに取の等もすみとちり  
 生よこの禁をりくおどちた新る變も清秘の忘けるそや  
 此時「お入舞といふ集お来とんそ中よ」焼ふりりはれとも

櫻けりぬち支考「梅が香や海川一裏」焼入存牧童「雪が  
 ひはも笠をく笠れ小屋の屋根北枝又雪清お掛りく奇仙  
 「杖提の祝儀にふらふ水替りお枝」曇りすれお和此益  
 時後春「飯越る人の笠きて杖寄く支考柳或春の人は後吾病床  
 下在里月夜浦りりたる夜おまると枝まやみもちく付ひ  
 けり犯湯那の世法やても有たらるる鬼角する中疾罵くて  
 治療術をうらとびく文おゆりはれが余流まると安何そ  
 下く走里ゆ犯強家よ入く生推我叩き後吾く我を捨てと  
 はより生流を大声おを泣いごりり柳丁を吹掃ちら絶よるハ  
 別へ遠く縁とるお方りとお初めお滅中「樂もあ舎く感  
 たりとくやば色を平生に交王思ひ厚くれくちらり」

佛流化

僧浪仕を東つ豆一如大僧正の蓮枝山にて紙中并波瀾新寺  
 此僧職をあり一年養病其雅懐をさそふく或夜をそりり  
 落村舎小て苦面一そ沙才のほま波瀾む此うを其前ッ  
 砥波山集りもほ志のたてとくそらえぬ道を予も一こは思ひ  
 ぬる中我城すと記せり生一はれ句残何りめて必廟集と志  
 一分入る果奮れ声や雄上川一半言の曇みもちて時あり余  
 一妻侍や抱一持ふ出のふにえ深十六年秋集りて夜に  
 鳴呼ま一いふか

僧千那

伴少千那を江面隈田本福寺の十二世一とく法名我城武上人  
 との心嘗くく月うう爾蓋材と号け生性輕悟敏達せり意門  
 此迦禁と稱さくは一連極のくはゆるはや初接一替れく此能ま

形や梅柳一字灯籠をるい物く能極ふ京條八年一寂れ七十  
 有三歳なり

小川破笠

小川平助ハ江戸の人性多能一して画と細子小長せり能名宗  
 字はドめ之語言よ従ひ後意門小連ふ兼若く里一附の句に  
 一妻ふもと家人わりの小橋狩生身被傷一とく秋接小味され亡  
 命するもり殺度或附本若れ山中又は法よひ入里高まつ死才も  
 ちく行跡小餅ま体一衣被るが破果く既ふを行れ子笠ま  
 ぬぶ里身一と糸堅一被被はとい食小を饑たるりれハを食も  
 形をあられぬ被ぬ子くかと吟して名我破笠と改し入里とあり  
 室より江戸へ帰く晋子小妻富虚集集も色食ももの句何のくを  
 する大と年久一とりのふき後志家まりて津輕あくる出れ

食録を垣より延喜甲申八十餘葉一して死するこゝに

活通

路車を何れ所の人をさるはと我知るに若くや一に板屋の何より  
既へ一人をりお申より一我為若近にけ抄の時道は傍らより物  
いひふ言風流の清く及ぶ初知より好み一掃形をればとて一そ  
れ可我痛く出て着ぬ豎に去も機もに一と一落と忍ぶ活世  
を振のゆくちよばいづれもまけ相あらは一落敷して曰く我い  
また親家一はく一活活の季吟の奇想を叩能發時若くは  
傍より一今ハ儂活のみどく知お遊ぐ生涯は余みとに油我  
小後く事と一と沙才の憐ふくく生より活通の存さば何と一  
らまらる一山椒の幸く皮そぐはせふかいぬくと人ふいそれく  
年比言少え活け抄を湊せで出せしと一固おを河や海と

此秋北志一遠ふる何となく姑く沙才若中絶より此れ  
とも若後馬の流と又生罪を許けり此より若若抄抄此  
画のみつゝ一出依所をり能るに或出お義仲寺めて亡沙遊  
俾の時此子大津の使者我活を生席を材くといひ又俾  
丹れ冠要回ん一何とぬ邪曲をせしと記さるハ大いおも  
誤王より若より播而の曲水く是す又出おも

活通より大坂小く墨俗い多したるものるや空んは一と  
年以おより忍く来る夏ゆく今又教るくお定らはとて  
あけ能國の言はれを感すくいつを平生此人おては常  
此人が若なる我ち良し何の不審り有なくや拙者一  
控く不返はるほしくい俗よる空をいても風狂の助け  
ちりのいそんハむし一の乞食よりハ筋王可中の

二月十八日

曲水榭

捕風尼

伴賀別と踊り捕風尼といへるは河風妻が女にて回廊  
 交回氏へ嫁するといふ交死して後雅髪一能落を以て宋  
 三に意門北よ手なりを夢縁と名え一の名月やわこれて  
 ほりる椽ばいら生酒名句我携く本禁集と名く世よりれ  
 予惜む屋一菊いよと友口小立く忠たつるま一時衣振志  
 世活ふと交ら色らうや後年深川の席へ使して能落社  
 といふ物を指すなり文書に記置き候ふと判せし物教書  
 小て右の肩より一寸そらまみしう記振ふり東捕子一は  
 生風家ありと歎奈し

智月尼 附乙別

智月尼は江州大津郡志人乙別が母たり初子とも風雅をハ  
 去娘んと意縁成沙と良一年乙別が東行する我送るとて  
 「わがと主人刀小ゆく旅を不ニ此寄嵩義を悼く」お  
 来去回一けり橋すいぬ「そる」てとえ屋すう久を協一本を  
 れで丁を命惜ちま橋遠身此老衰をうとちく「我形も衣  
 小入ゆる旅種ふ智月」山の香海を川る香吹くお「昼の  
 昼する此夜ま体冬更うお乙別晩年此尼沙小むり川く紙  
 筆残体へ帘子の裡久絶合せく我う形又と成屋き物出ま  
 残し玉くとおむ新臨方らうも六十小ちう記尼小形又  
 まを乞まういと力ちいと戯れふがう出て笑へいとそ奈そそ  
 沙の死細ををらうとめ計し知わうや浪登すりその愛

我若来ア一も今年此のふり一

短居松風

短居松風之江戸村人その身愈家一して健る家と云いんとも  
 生涯耳龍舞の憂何里一見仙風と云ふ蕉つ小遊ふ雀歩こ  
 号す一柳灯此夜に燈ふ一松字一がう午りと接神の藁や秋の  
 風一舞一や冬日くの益此出来一け昔も又掃く一一同一  
 り少海深川又唐戎むすへる江の此を殊小力を辱せり  
 と云ん一年毎に送別君句又何と云く芝吹風も哀ある  
 素裳よ水を弾一して秋ちもや冬ふ海や作者もまふに只  
 朽りふるの深なるんといへる里或出又少此及後此の人支考と  
 繪更せ海や一旭すい大なる喜延あり牧臺の粟刈筆集  
 小松風より支考人の文出あり雪河といはく

悪るりもよきよ一居る候一くはぬいづるも我と吟トト  
 我を慰むばうりふは法るは免る候ト一東洋此中に  
 進む此句我法中一ゆく有るをいひて其か福業のり  
 「改れす一縁も建老のふゆる復の中  
 聖立宗係十八年八十餘歳一して死せり

野坡

高家野坡之越れあゆの人はトめ江戸又進び後浪谷に位  
 す櫻本社と号に惹つ君徳小附合の伴戎候と云は此人と  
 越人よ越一係者あり一と云ふ我敢向あり一妙なる一子親能  
 此出まぬ核子り余一長松が程の名で東海内茶々余一はき揮  
 際してうら山茶寂ふり一け江の極あゆひえや神去ぐれ  
 或夜遺そのあよ悪入り一坡お巻一と云く我一物の旅人







首良之伝所後傳の聲なり一とせ東武又逆ぐ意つ又入里  
 つは小名河り一はのくと鳥居むや密北妻「果をや」  
 子山一垣百尺のはあふたるふつと根亮ふ「水五尺及と河急の  
 市北は又振するに栗の細道より首良之後成居みく俵張團  
 長時といふ而小ゆる里河れば先づ内て初と有く一ゆ記して  
 たふま休ともそ教書又いそぐりその「然み」  
 勝み難を危のあて雲ははすふが如しと北河河急は河本の  
 難情思ひ居居だ一捨る成或之此人北越の山中よて河急  
 桑小遠引列れさうそいつるい大ある漢方り若縁集し  
 舞揃ふての吟も一たがみ休て紅一はは汗拭と是等よと  
 そ北志の極まるとは

原田守右

原田守右 原田守右 原田守右 原田守右 原田守右

原田氏能名守右和別郡山北重居たり少小より経悟人  
 超り少小傳東教書主人扱はあひに通るる或時人く  
 打家王梅の題のどて教句せよと少小材の云「少小進  
 少く一先うけの急の手扱や尚書梅を」  
 後變じそ意つ小入取貞亨中少小存存少小持つる時その言  
 に洋画して一日松玉と三海北奇仙河り  
 原田氏能名守右の記も失くすよ「後胤傳」  
 ぬ「抄」の集人少く去流ありそ「い」系は水が沙才の初を原  
 及成思小の志流ゆして元祿の比邊よ意つ難情れあ尚と称  
 らは少小後後もそ意慕他小吳方り存の第位をやりて  
 こそあて「大系ゆ小意せ」梅の急はう里津川へ居く「西つ  
 竹北財五や唐の江急人清を一面急急はひく松北桑桑うま  
 或の「鳴千多たたあ北」勝元その「後」つむ「一」教く抄小

蓋面黒

豎一尺四分

月山



栗穂及葉若

三月月  
銀泥

飯陀箱付  
貞享年間意翁踏  
山之原道過  
郡山而止於字古家十

蓋裏

袋椅水衣切



竹青

山十廿六

件目与弟子杜國有云  
依之能滑于時  
翁踏別錄此物  
右深秘石室云

身外黒

竹山



中板椎木

道の紀号入

諸物入

後有故道為  
正正康士有僕嘗行  
而得摸之跡  
火止之兵色為附屬

怪松若天同

焉今依其家他以減生  
竹末之正尔

儀伴采人



朱青黃銀泥  
雜色

軸葉此青



夜一子素崇ありと載ふ

知足一家

知足之歩少ゆゆ法其人慈翁と交り海一宅居我奴照唐  
地廉亭と号す一志意く風流あり或百姓の二男三男とれ  
く小仕並ゆる後居小中若ゆる句「諸君果報とく」一  
家居ふ又一く風や吹程吹く若志一知足の子父は志我  
達く千を掛き若に「誰とく一夜く」一夜若志一「襟羽」松  
根小五代茂河屋くる時素ふ知足母「里かよひいこらあや就  
屏端御事」ふ素一「徳つとれ」屏端若子

山口素崇

山口氏之江戸の人素不和藩此志を嗜く侍文を若に老母  
依く至孝あり人何ふひを妻を従ゆる成すくむるを固禱

て居みぬ是祝のふ不遠んる我忍れいなり等実の君子  
歎稱すく一弱冠より季吟若つと進く能道此達者と  
ける唐此名を今日といひ又素崇といふもその  
別号あり後或主家茂禱してあり深川の別荘に達  
此成地里交友を集く晋北惠達う進社に撤せりあり能  
あす若ら社中と稱するは是此等又依てなま句ら若社よ  
類すは句「池小精赤」仮名く記若ふ柳く友を作み赤言若  
采種「年」とや「軍」ちぐれつは後河「旨」す記ぬふや月若  
十三夜「孫」若此の「夜」と家や新鼓陣又人「小」捨矣せり  
目にい若禁山ほとくきは初川河豪快あくと可見享保二  
年八月七十五歳して歿せり或人慈翁と能道若りい  
んと守ふ唯死きりと答られ一「このりは若ハ翁と此彼此

交際おはらり多し古人の風阿まきいさなつりし然るに今時の  
人招り断金銭とあつて文の冠髻はれぬ呉越を障る  
接成扱する名百とちなり嘆息するに録あり

能家奇人談巻之中  
此書は陣取べき地を擇みとり用べき水を検  
ありし水成なき水とを法と詳し記し  
疫病痢疾をのうつる仕を凍死溺死金創  
銃創のよとす前編小書淺きものをも悉く  
記し勇氣長ずる必驗の妙薬蝦虎の寒地  
小冬を凌ぐべきみと箭鏃銃丸の肉小入を  
出そ奇方とてと書載其の外軍中必用の  
もと盡く記したる書を

救急摘方

二冊

厩馬新論

一冊

此書は今の世の馬乃仕立方を軍用小立を水成  
多しとて人馬とも溺死を論じ且  
骨少くて馬を養ふ大とより馬成健くす法  
馬の病と察すゆふとてを詳論したる武  
家必用珍書を

救急心用法一名簡易養生記 一冊

養生食物心得 柳澤 編輯 一冊

飲食養生新書 山本義俊譯述 五冊  
慈母教草 長谷川協輔 高田 義甫 合輯 二冊

東京本石町丁目書物問屋

江嶋喜兵衛發行

313  
28

終

